

除くことがなくても、地先の浚渫や掘削でも湖底が浸食され、結果的には群落の崩壊を招くことがあるので、各種事業に当たっては慎重に対応することが必要である。

②については、1992年以降の北印旛沼のCODの水質悪化の原因として、刈り取りによるオニビシの消失が底泥から水中へのリンの溶出の増大を招き、植物プランクトン発生の制限因子となっている水中のリン濃度の増大となり、内部生産CODとなる植物プランクトンの発存量が増大し、CODが増大したと考えられた。

ここでは、結果として、印旛沼におけるオニビシの生育は、水質浄化に役立っていたと言え、水草の水質浄化能が実証されたと言える。

しかし、このような結果を招いたことは極めて遺憾なことである。とかく、事業はいったん決まると途中の評価なしに続行されることが多い。今後は、自然の生態系を相手にする事業については、事業の進行途中で生態系への影響を評価するなど、生態系の変化に注意を払いながら事業を進めるなどの配慮が望まれる。

水草群落はさまざまな野生生物に生活の場を提供すると共に、人間にとっても多くの恩恵をもたらしてくれる。印旛沼における水草群落の衰退は、将来の印旛沼にとって大きな危機であることから、生態系の基盤である水草を回復するために、関係者が一体となって取り組んでい

くことが望まれる。

参考文献

- 生嶋 功・栗原真理, 1989. 富栄養水域で群落を維持するオニビシのストラテジー. 水草研究会報 37: 8-10
- 印旛沼漁業共同組合, 1987-1995. ヒシ刈り取り事業実績報告書.
- 笠井貞夫, 1978. 千葉県生物学会研究発表会発表要旨.
- 建設省関東地方建設局利根川下流工事事務所, 1995. 印旛沼の自然.
- 小林節子, 1993. 水環境からみた印旛沼, 手賀沼の水草の近況と今後の課題, 水草研究会報 50: 1-11.
- 小林節子・宇野健一・吉澤正・藤本千鶴・藤村葉子, 1991. 印旛沼の水生植物調査—オニビシの繁殖拡大について—. 水保研資料 No.56, 千葉県水質保全研究所.
- 桜井善雄, 1994. 湖岸帯の自然環境とその保全. 汽水湖 6: 3-8, 宍道湖・中海汽水湖研究所.
- 千葉県, 1979-1994. 公共用水域水質測定結果.
- 千葉県環境部水質保全課, 1982. 印旛沼・手賀沼におけるプランクトン等実態調査報告書.

○関口晃一著『川と水田に囲まれた村—はるかなる心の自然』(制作同人者, 1997年5月, 216p, 2, 600円)

「本書は、自然の中に埋もれて過ごした私の少年時代の思い出と、これをめぐる、その後のふるさととの自然の変遷を、思いつくままにかきならべたものである」とまえがきにあるとおり、関東平野の農村で育った著者の体験をつづっている。数十年前までどこかの田圃や用水路にもふつうに暮らしていた生きものの話は、40代以上の人なら共感を覚えるにちがいない。理屈っぽい話はどこにもなく、私たちが失った自然を淡々と記録したものが、身近な自然の保全に興味のある人にはぜひ一読をお薦めしたい本である。 (角野康郎)

○鷲谷いづみ著『サクラソウの目—保全生態学とは何か』(地人書館, 1998年3月, 229p, 2, 000円)

保全生態学の研究と普及に精力的に取り組む著者が、15年来の研究で明らかになったサクラソウの暮らしの成り立ちと、人間の行為がどのような形で種の存続に影響を及ぼしてきたのかを平易に解説し、現在の種の絶滅危惧問題の深刻さと保全の取り組みの重要性を訴えている。最後の2章はサクラソウを離れ、生物多様性とその保全の意義を論じており、保全にかける著者の情熱と使命感が伝わってくる。内容はわかりやすく取り付きやすい本なので、今まで保全生態学の本を読んで難しかったという方もぜひ手にとっていただきたい。

(角野康郎)